

はじめての広島で

菊組 A.T.

1945年8月6日。この日は広島に原爆が投下された日です。このことを知っている人はほとんどだと思いますが、この日についてくわしく知っている人は少ないと思います。私も、今年の夏休みまではその中の一人でした。

私は、YWCA主催の「ひろしまを考える旅」に行きました。なぜこの旅に行こうと思ったのかというと、ただ単に「広島に行ったことがないから行ってみたい！」という理由からで、「原爆について考えるため」とはあまり思っていませんでした。そんな気持ちで迎えた初日、私を待っていたのは、広島平和記念資料館の見学でした。実は私は、広島に行く前からこの見学には行きたくないと思っていました。小学生の時に、広島・長崎の原爆について習ってからずっと、被爆した様子などはこわいからという理由で、目をそらしてきた私にとって、全く気分が乗りませんでした。少し嫌な気分になりながら見学を始めた私は、様々な現実を突き付けられました。中でも衝撃をうけたのは、やはり被爆の様子です。実際に被爆した人の様子を再現した模型や、全身大火傷を負った写真など、血なまぐさいものがたくさん展示してあり、胸が痛みました。中には、服や髪の毛、ツメなどの遺品や、元気に遊ぶ子ども達の写真の隣りに、火傷を負った子ども達の写真がかざってありました。今まで何も知らうとせずに、こわいという理由で目をそらしてきた私は、目の前に突き付けられた現実から目が離せなくなりました。何の罪もない人たちが原爆によって未来を奪われてしまったと改めて実感した時、涙があふれそうになったのと同時に、わかっているふりをして逃げてきた自分の愚かさに気が付きました。戦争を知らない私達だからこそ、知らなくてはならないことだったのだと思います。二日目のプログラムの坪井直さんによる被爆証言の中でもこのことを繰り返しおっしゃっていました。坪井さんは爆心地より約1キロで被爆をした被爆者の方で、現在89歳です。被爆をしたせいで、ガンが二つあり、心臓病も患っているそうです。ですが、ハキハキと話していて、笑顔が絶えない明るい方だったので、私はとても感心してしまいました。そんな坪井さんが証言して下さったのは、今から69年前の8月6日、自分がどのように被爆したのかということと、火の海となり、一瞬で焼き尽くされてしまった広島の様子です。自分の体は至るところから血が流れ、広島町の建物の下敷きになっている人や、顔が火傷でただれている人であふれかえり、更には火の海となったというような、とてもつらく、残酷な内容でした。坪井さんはそのお話の中で、こうおっしゃっていました。「何があっても人の命をとってはだめ。戦争をする理由にはならない。」私はまさにその通りだと思います。そしてこの言葉は今の日本にも向けられていると思いました。安倍首相は集団的自衛権について、「戦争をするわけではない」と言っていますが、本当にそうなるのでしょうか。今までは直感的に「いやだな」と思っていたのですが、広島に行って、色々な経験をして、被爆者の方の思いや戦争の恐ろしさを知ると、やはり行使すべきではないと確信を持つようになりました。確かに、日本は守りたいけど、戦争はしたくないというのは綺麗事なので、行使すべきだという意見

もわかりますが、二度と戦争をしないために定められた、憲法九条の平和主義を戦争ができるように解釈を変えるのは、おかしいことです。今、私達にできることは、もう戦争によって罪のない人たちが命を落とさないように、戦争の恐ろしさや原爆の恐ろしさを、次の世代に伝えていくことだと思います。被爆者の方々の減少が問題となっている今、私達若い世代がその思いを伝えていくべきなのです。そして今、日本に戦前の時代が戻って来ようとしている今だからこそ、そういった思いを知る必要があると私は思います。

この夏、初めて広島に行き、見たり聞いたりしたことは、一生忘れられないと思います。毎年この旅に参加して、原爆や戦争についてもっと理解を深めていけたらいいです。